

新妻物語

にいつまものがたり



懺zange悔
ILLUST/ナポリタン

Produced by まほよば

本作品はフィクションであり、実在する、人物・地名・団体とは一切関係ありません。

また本作品を無断で複製、配布、転載、配信することを禁止します。

※本作品は見開き表示がデフォルトで設定されていますが、左右のページが逆で表示される場合は、左記の設定変更をお試しください。

「編集」↓「環境設定」↓「言語（もしくは言語環境）」↓「デフォルトの読み上げ方向」↓「右から左へ」を選択

目次

- ・ 薫の場合 前編 P 3 ㄱ
- ・ 薫の場合 後編 P 9 1 ㄱ
- ・ 百合の場合 P 1 3 9 ㄱ
- ・ 美香子の場合 P 1 8 5 ㄱ
- ・ おまけ P 2 6 7 ㄱ

定時のチャイムが鳴る。

俺は反射的に机に突っ伏した。

「ふい〜」

まるで苦難溢れる長旅の末に、ようやく温泉にありつけた旅人のような声を出す。肩を回し、首を捻り、背筋を伸ばすと、やっと一段落着いたとの実感が沸き、自然に笑みが零れた。

蓄積された疲労感はまだ身体の芯で燻ってはいるものの、意気揚々と立ち上がり、軽やかな足取りでタイムカードを切ると、すれ違う同僚に挨拶を交わしながら廊下に出る。そのまま浮き浮きと通路を足早に歩いて行くと、不意に背後から声を掛けられた。

「どうした？ やけにご機嫌じゃないか」

振り返るとその億劫そうな声の持ち主が、書類を片手に苦笑いを浮かべている。

「あれ？ 藤田先輩残業ですか？」

「すっとぼけた事言いやがって。会議だよ会議」

疲れが見える表情と口調だが、その引きつった笑顔は流石我が営業二課の貴公子という異名を持つ藤田先輩。口元から覗く白い歯は眩しいほどに爽やかだ。ストライプの入った紺色のスーツも、細身で長身の身体によく似合っている。下手をすればホスト崩れに見えるかねない装いだが、軽くカールした長めの髪と相まって、どこぞの国の王子様のような雰囲気醸し出している。実際学生時代も女子からは裏で『王子』と呼ばれていたらしい。

「そいつはお疲れ様です。俺はようやく残業地獄から解放ですよ」

「まあ、お互いこの頃大変だったもんな。俺もこれ終わってようやく一段落だよ」
「別に良いじゃないっすか。先輩帰っても猫が待つてるだけでしょ？」

「お前、俺のシイを馬鹿にすんなよ」

「先輩そんなだから、彼女出来ないんですよ」

彼は大袈裟に肩を竦めながら鼻で笑った。藤田先輩はまだ二十六歳だが、今年からは既に主任の役職についている。歴然たる会社の上司にこんな軽口をきけるのは、彼とは大学時代からの付き合いで、仲の良い兄弟分という事もある。

「うるせえな。だったらシイより可愛い女連れてこいや。世界一の美女だぞ」

「いやあ。案外身近に居るもんですよ。その世界一の美女よりいかした女ってのは」
「は？ 誰だよ」

先輩は顎に指を添えると、天井を眺めて思案に耽る。中々答えが見いだせないように、俺が黙って自分の顔を指差すと、彼は苦虫を噛みつぶしたような表情を浮かべた。

「いや……悪いけど俺そういう趣味無いから」

「違う違う。俺じゃ無い。ほらほら。俺の嫁。ワイフワイフ」

「ああはいはい。薫（かおる）ちゃんな。うん。まあまあなんじゃないの。シイのニランクくらい下だけど」

「ははは。先輩といえども聞き捨てならない言葉ですね」

乾いた笑い声をあげながら、俺は握り拳を胸の前ほどに持ち上げた。

「わっ。待て待て。社内暴力良くない」

「ふっふっ。わかってくれれば良いんですよ」

不敵な笑みを浮かべたまま拳を引く。

「そうだな。ニランク下くらいだよな」

「てい」

ローキックを膝下に向けて打ち出す。むろん冗談で放たれたものとはいえ、先輩はそれを悠々と足裏で止めた。恵まれた容姿に運動能力、その上出世も早いときたら嫉妬する気すら起こらない。

「おいおいお前上司になんてことしやがる」

「正々堂々と権力振りかざす先輩に憧れます」

「そうだろ。大人を舐めるなよ？」

「二つしか変わらないでしょ」

「ていうかお前昔空手やってたんだろ？ そんな肉体凶器で攻撃するなよな」

「それ小学校低学年の時の話でしょ。一年で辞めましたよ」

「お前ってわりと飽き性なところあるよな」

そう言われると確かに思い当たる節がある。趣味でもなんでも、長続きたものが一つも無い。根気が無いわけではないと思う。ただ途中から興味を無くしてしまふのだ。ただそんな俺にも、一つだけ長く続いているものがある。その事に関して、我ながらまったく情熱を冷ますこともなく、言葉通り自分の人生の一部にするほど執着してしまっていた。

「まあ、薫だけはいつまで経っても飽きることが無いですけどね」

「うわ出たよ。新婚特有の惚気。気持ち悪っ」

「気持ち悪いって何すか？ 部下の家庭環境を慮るのも上司の務めでしょ」

「そんな業務を課せられた記憶は無い。それなら俺のシイの魅力をだな……」

「君達は何をやっている？」

俺と先輩以外に誰も居なかった廊下に厳格な声が響いた。同時にカツ、カツ、カツ、とヒールの音が規則正しいリズムで近付いてきた。

「これはこれは。桜田主任殿」

藤田先輩が彼女に軽く会釈をすると、俺も釣られて頭を下げる。

「廊下で騒ぐな馬鹿共」

細身のスーツと眼鏡が似合う女性だった。艶やかな黒髪を後ろで結っている。見た目で判断するまでもなく、声で桜田主任だと識別できた。

たしか年齢は二十八歳だったはず。まだまだ若い。その上女性ながらに藤田先輩と同様に主任の職につき、異例の速度で出世している。

彼女が持つ毅然とした口調とその遠慮の無い物言いに加え、どこか冷たさすら感じる知性的な美人とくれば、他人を見下しているなどと勝手な悪評を立てられがち

だが、この人に限ってはあまりそういう話を聞かない。俺自身もそう感じたことはない。実際厳しい人なのは確かではある。

桜田主任は眼鏡のブリッジを人差し指で微かに持ち上げると、俺の方をぎろりと鋭く睨んだ。

「何をやっている白石君。君の仕事は今日で区切りがついたはずだ。さっさと帰宅しろ」

つつけんどんな言葉を投げかけながらも、「君は結婚したばかりだろ。いいか？仕事と家庭を両立させて一人前の男だぞ。たまには早く帰って奥さん大事にしてやれ」なんて事も言ってくる。

「はい。ありがとうございます」

家庭のことまで口を出す上司というのは、ややをもすれば疎ましがられることも多々あるが、彼女からはそういった煩わしさは一切感じない。事務的すぎず、かといって踏み込みすぎない。そんな絶妙な部下との距離感が計れる人だ。年齢は藤田先輩はおろか俺ともそう変わらないのに、その上司ぶりに気負いは感じられず、威風堂々とした貫禄すら感じさせる。流石我が社始まって以来の才女と名高い人物だと素直に感心する。中小企業の主任程度とはいえ、二十八歳の女性が中々なれるも

のではない。それは藤田先輩も同様だ。二人はタイプこそ真逆だが、人の上に立つべき者が持つ、面倒見の良さや視野の広さを兼ね備えていた。

「あ、なんだよお前。桜田主任には従順なのな」

「部下として当然の対応をしたままです」

「俺にもそういう態度を示せ。上司命令だ」

「気遣う言葉の一つでも投げかけてからそういう事を言っして下さい」

「くそ。口の減らない奴だな」

「ほらほら。いつまでじゃれ合ってるんだ。藤田君もさっさと会議に行け。そんなだから君達が付き合ってるなんて噂まで立つんだ」

「え？ 何その噂……」

藤田先輩が顔をしかめる。

「給湯室ではもっぱらの噂らしいぞ。白石君の結婚も偽装に違いないとな」

鋭さと厳しさを伴う美しく整ったまま顔でそんな事を言われる。どうやら冗談ではないらしい。というよりは、桜田主任はこんな冗談を口にしない。真面目にそんな忠告をされると何とも言えない失望感が胸に刺さる。

「……むら」

がっくりと肩を落とす俺の背中を、藤田先輩が声を上げて笑いながら叩いてきた。「はっはっはっは。何だよお前ってそうだったのか？　じゃあこれから俺とデートといくか？」

桜田主任がその横顔に、冷たい視線を投げかける。

「藤田君。君はこれから会議じゃないのか？」

「ああ。そうでした」

「さっさと行け。白石君もご苦労だったな」

「はい。お疲れ様でした」

改めて桜田主任に頭を下げて、その場を去る。

「薫ちゃんによろしくな」

背中に藤田先輩の声が掛かったので歩きながら振り返る。

「また今度遊びに来て下さいよ。薫も喜びますよ」

「やだよ。新婚熱々の空気は独身者には毒だつての」

その言葉に黙って笑顔で返すと、久方ぶりに日が暮れる前の帰途についた。

「そんな事があってさ。どう思うよ？」

食卓に並んだカレイの煮付けを箸で突きながら問いかける。久しぶりの我が家で
の夕食。どんな話題であろうと、楽しくないはずがない。

「え？ てつきりあたしもそうだと思ってたけど……」

薫は味噌汁を一口啜ると、淡々と言葉が続けた。「プロポーズされた時も『あゝ
これは偽装だわゝ。あたし利用されてるわゝ』って思ったもん」

味噌汁を吐き出しそうになるがなんとかせき止める。しばらく餌付いてから薫を
睨んだ。

「……そんなわけないだろ」

「それくらいあの王子様とは仲良かったねって話。大学の時もそういう事言ってる
子周りにいたよ」

「マジで？」

「マジマジ」

「……一応言っておくと、そういうケは無いからな？」

食卓に身を乗り出して、真面目な表情で顔を寄せる。すると薫は愉快そうにから
からと笑った。

「わかってるよ。なんでそんな真剣なの？ あゝ、おっかし」

目元を指で拭いながら笑う年上の嫁に対して、口をへの字に結んで乗り出した身を元に戻す。

「心外だな。そんな目で見られてたなんて」

不満そうにそう呟くも、薫はまだ愉悦の余韻から冷めないように、くすくすと笑みを零す。

「冗談だよ。嘘嘘。嬉しかったよ」

「何が？」

「プロポーズされた時」

「泣いてたもんな」

意趣返しとばかりに口端を釣り上げる。薫は動じた様子も無く、二人分の湯呑みにお茶を注いでいく。

「え？ 泣いてないし」

「泣いてたじゃん」

「泣いてません。やめてください。風評被害です」

「なんか目から液体漏れてたじゃん」

薫は湯呑みを俺の方へと差し出しながら、俺と視線を合わせた。

「いやあ。ついつい『うしお〇とら』の最終回思い出しちゃってさ」

「なんでそんなタイミングで!？」

「あんたがぬらりひよんに似てたから」

「全然似てないだろ。ていうかせめて人間にしてくれ」

「あははは」

薫は頬杖をつくのと、にやにやと見つめてくる。その大きなアーモンドアイはまるで好奇心旺盛な猫のような愛嬌さを感じる。実際薫はかなりマイペースな人間だ。常に飄々としている。雲のようにつかみ所が無い。しかし……。

「嘘だよ。すごい嬉しかった。あたしも早くあんたと結婚したいってずっと思ってたから」

その雲は時々綿飴のように甘くなる。

飽き性の俺が薫に対して甘酸っぱい愛情を、色褪せることなく抱き続けられているのは、きっとこの奔放ともいえる明朗さのおかげだろう。彼女のおかげで毎日が新鮮で、そして幸福だ。

「まったく。いつプロポーズしてくれるんだってずっとやきもきしてたんだから。いっその事こっちからしてやろうかって何度思ったことか。友達に止められたから

我慢してたけどさ」

「友達って？ 百合先輩とか美香子先輩？」

「そうそう。百合が『きつと白石君からしてくれるよ。大人しく待ってたほうが良いと思うな』って言うてくれたの。ちなみに美香子は『あいつやっぱ王子と出来てんだって。絶対そうだって』ってしつこかった」

「……あの野郎」

百合先輩と美香子先輩というのは、大学からの薫の友達だ。当然俺と藤田先輩とも面識がある。我が愛妻である、のらりくらりした昼行灯な雰囲気漂う薫に、小柄で童顔のくせに姉御肌ぶる美香子先輩。そして百合先輩はその対極に位置するおつとりした長身の女の子（薫は百六十ちよつとあるが、百合先輩は百六十後半だ。美香子先輩は口喧しくせに多分百五十あるかどうかだろう。あのチビめ）。そんな個性溢れる仲良し三人組は大学でも一際華やか存在だった。タイプは違うが全員目を惹く美人で、そんじよそこらのアイドルユニットにも引けを取らない。勿論うちの薫が一番なのは明白だが。

とにかく薫には、なんの銜いもなく親友と呼べる女性が二人居る。結婚時期までほぼ一緒だったくらいだ。

「でもさ、本当嬉しかったよアレ。いつか機会があったらまた聞きたいもんだね」
普段なら絶対そんな台詞を吐きそうにない薫のそんな言葉にどきっとする。酔っているんだろうか。お互いビールを一杯飲んだだけだが、薫は結構酒に弱い。俺も人の事は言えないが。

淡い思い出を振り返るような視線を遠くに向ける薫に対して、「別に……そんなもんいつでも言うけど」と嘯いてみる。

「へー。ほー。ふーん。じゃ、言ってみてよ」

頬杖をつきながら、にやにやと挑発するように大きな瞳を輝やかせてきた。

「ば、馬鹿。今はほら、カレイの煮付けがだな……」

「あーら照れちゃって。うちの旦那様ってかーわいいんだ」

「ぐっ」

主導権を握ろうとしても、結局はからかわれるだけなのだ。出会ってからのこの関係は変わらない。しかしそれが心地良かったりする。まあ姉さん女房なのだからある程度は仕方無い。

薫との出会いは大学。言われるがまま所属していたサークルが出会いの場だった。薫も一つ上の先輩だったが、気兼ねなく接することが出来るお姉さんといった人柄

だったから、いつの間にか仲良くなり、そしていつの間にか付き合っていた。結婚する時は流石にいつの間にか、というわけにはいかなかったが、それでも世間一般から見たら、順調な交際からの滑らかな着地だったと言えるよう。

もう付き合ってから六年にもなる。そりゃ薫も遠い目をする。俺は二十五歳になり、薫は二十六歳だ。

くふふ、と目の前で顔を綻ばせる薫の笑顔。それを目にするだけでも、生まれてきて良かったなどと臆面もなく言ってしまう。

愛する女性を天体に例える言葉は、もはやうんざりするほど世の中に蔓延しているが、それでもあえて先人に倣うとするならば、薫は地球だろうか。清々しいほどに青く、そして全てを飲み込むほどに広い海。浮かんでは流れていく白い雲。それらは時に俺を翻弄する。しかしそれは同時に還るべき母なる大地を連想させるほどに、深い母性を感じることもある。

「それにしても目から液体漏れたって表現は若干引いた」

「今更そこつつこむなよ」

他愛の無い会話で笑い合う。

俺と薫の日常はそんな何気ない幸せで満ちあふれていた。

「駄目っばい？」

「……ちよっと待って」

焦りを隠せない俺に対して、薫は優しく微笑む。

「いいよ無理しなくて。まだ疲れてるんだって。ここのところずっと残業続きだったんだから」

いつもは俺をからかうのが大好きな薫も、この時ばかりは皮肉めいた口調を一切交えない。

「大丈夫だって」

ここで引き下がっては男が廢る。薫の乳房に顔を埋めると、付き合い出した頃と何ら変わらない、その艶やかな柔肌を舌で愛撫しながら、久方ぶりの夫婦の営みを再開する。最後にしたのはいつだろうか。もう思い出せない。半年前に結婚したものの、それから数えるほどしか肌を重ねていない。

まだ俺は二十五歳。多少の疲れで勃起不全になるような年ではないはず。加えて目の前に寝そべる身体の肉付きは、男を奮起させるには十分すぎるばかりか、むしろ暴走するほどに猛らせる女性特有の色気に満ちあふれている。

仰向けに寝ていてもお椀の形が崩れる素振りも見せない、ツンと上を向いた二つの豊かな肉丘。しかし指先が触れるだけでぶるんと全体が揺れる瑞々しい弾力。Eカップのポリウムは伊達では無い。視線を下ろすと縦長に切れた綺麗なヘソ。引き締まったお腹周り。すらりと伸びた太股の肌はツヤツヤと輝きを放っている。普段は女らしさを感じさせない言動が多い薫だからこそ、男を誘うようなこの肉感はいかに余計にそそられる。これで勃起しない男が居ないわけがない。俺も結婚前までは、その極上の身体を猿のように貪り尽くしていた。

しかし半年前の結婚と同時に始まった連日連夜の残業。あまりの疲労に休日も寝て過ごすことが多くなった。そして薫も体力が有り余る二十六歳。さらには新婚ほやほやといえれば寂しい部分もあったのだろう。性欲には無頓着ともいえるほど、執着も関心も無い薫ですら、何度か夜に誘ってきてくれたことがあった。付き合っていた頃はそんな事は一切無かった。もし普段の俺なら、その誘いに対して有無を言わず押し倒していたことだろう。しかし疲れ果てていた俺には、そんな新妻の誘惑に応える余力すら残していなかったのだ。

そして今に至る。

中々反応しない息子に焦りを感じながらも、誤魔化すように薫の身体を愛撫して

いく。口に含んだ桜色の乳首は、俺の陰茎の代わりとでも言いたげに、はち切れんほどに勃起していた。陰部に手を伸ばす。濃い目の陰毛を指が掻き分けると、すぐにくっしよりと濡れそぼった暖かい感触に包まれた。そのまま指を陰唇にそって這わすと、やはり堅く屹立した肉豆が触れる。

「は……ん」

僅かに身を振りながら甘い吐息を漏らす。

薫が明らかに感じているその様子に、俺は驚きを隠せない。

普段は挿入中でも淡々とした様子が見受けられる薫が、この程度のお愛撫でここまですがるなんて。余程欲求不満を募らせていたのかもしれない。普段は淡泊な妻がいつも簡単に淫れる姿は、本来ならば同時に夫を興奮させる材料にしか成り得ない。実際俺はそんな薫に、目眩に襲われそうなほどの可憐さを感じた。朝から晩まで低血圧のようなテンションの低さを見せ、ゴキブリが出てこようと眉一つ動かさない薫が、いつも簡単に女の顔を見せている。気恥ずかしそうに俺から逸らした瞳は明らかに情欲で潤っており、血色の良い唇は微かに開いて切なそうな吐息を漏らし続ける。中々見られることのない絶景だ。いや、もしかするとこんな薫は初めてかもしれない。

そんな薫に対して甘酸っぱい感情で胸が詰まる。

当然性的にも興奮している。

薫の吐息が耳をくすぐる度に、俺の指がすすべの柔肌を撫でる度に、鼓動は加速を強めていく。

しかし今の俺は、どういうわけかまったく勃起する気配が見られない。

薫は俺から視線を逸らしたまま、様子を伺うように手を下腹部に伸ばしてきた。細く長い指が力強さの欠片もない陰茎を摘まむ。ふにやりといった感触が、薫の指を伝わっていったのは明白。その事実にはやはり非難の色は見えないが、切なげな色はより深みを増している。久方ぶりの昂ぶりにより、半開きになっていた口をきゅっと一文字に結った。その微かな動作には大きな覚悟が覗き見える。

「……横になつて」

「え？」

「いいから。仰向けで」

性行為中に薫の方から、何かを求めてくるなんて事は記憶に無い。そんな初めての出来事に戸惑いながらも、言つとおり薫の横で仰向けに寝転がる。すると薫が

すつと上体を起こして、拗ねるように唇を突き出した。これは薫の照れ隠しの時の癖だ。そして俺の腰の横から再び上体を倒していく。しかしその顔が向かう先は、俺の下腹部だった。「え？」と疑問の声を上げる暇もなく、萎びた陰茎が温かい感触で包まれる。膣とはまた違う、くすぐったくて腰を引いてしまいそうになる感覚に困惑した。しかしそれはすぐに、勃起していない鈍感な肉棒ですら、溶けてしまいうようなほどの快感に見舞われる。

ようやくそれがフェラチオだとわかると、俺は驚きを隠せずに、「いいの？」と思わず聞いてしまった。薫の横顔は髪に隠れて見えない。しかしその唇が、俺の陰茎を咥えていることは明らかだった。

こくりと頷く薫。

そして首がゆっくりと前後していく。

フェラチオが初経験だった俺にですら、はつきりとわかる不慣れな動き。

それもそうだろう。薫だって初めてなのだから。

付き合っている頃に何度かお願いしたことがあるが、薫は頑なに口での奉仕を拒んでいた。そんな薫が、自ら俺の性器を咥えてくれている。それは至福の感触のはずだった。稚拙とはいえ舌や唇が陰茎に纏わり付く感触は、頭が蕩けそうなほどに

気持ちが良い。しかしその薫の行動から、俺は要らぬ重圧を感じてしまった。嫌がっていたフェラチオをさせるほどに、薫に寂しい思いをさせてしまったのではないか。普段は淡泊な薫が前戯で身をくねらせるまでに放置していた事に、自責の念を感じずにはいられない。そんな気持ちが勃起をさらに遠ざける。薫は不器用にも舌を絡ませてくるが、一向に肉棒が男らしさを取り戻す気配は感じられない。

「……悪い。やつぱり疲れてるみたいだ」

謝るのは余計に駄目な気がしたが、それでも謝らずにはいられなかった。

薫はその言葉が聞こえていないかのように、数秒間フェラチオを続けたが、やがて首を動きを止めると、耳に掛かった黒髪を掻き上げながら顔を上げた。気まずそうに頭を掻くと苦笑いを浮かべ、「ごめん。下手だった？」などと尋ねてくる。つい言葉を詰まらせてしまうと、薫は俺の胸に飛び込むように額を押しつけてきた。

「仕方無いじゃん。初めてだったんだしさあ」

何も言っていないのに、冗談めいた口調で言い訳を口にする薫。まるで挿入出来ないのが、自分の責任であるかのような言い草。それは俺の不甲斐なさを有耶無耶にする気遣いであることが、手に取るようにわかった。

いっその事罵倒でもしてくれた方がまだ気が晴れたかもしれない。

いつのも薫なら、鬼の首を取ったかのように、ここぞとばかりに「情けないなあ」と意地の悪い笑みを浮かべてきたことだろう。しかしそれすらない。俺の二の腕に頭を乗せると、失敗を咎められた子供のように唇を尖らせている。あくまで挿入が叶わなかったのは、自分が至らなかつた所為だと言わんばかり態度。俺に重圧を感じさせないための演技。そんな薫の優しさに胸が温かくなるも、やはりその奥では焦燥感が募る。しかしここまで配慮されて、俺がそんな感情を表に出すわけにはいかない。

ぽんぽん、と薫の頭を撫でると、「ありがとうな」となんとか笑顔を浮かべる。少し引きつっていたかもしれない。

薫は照れくさそうに視線を逸らし、「べっつに」と素っ気なく呟いた。そして「……ていうかさ」と言葉を続けると、両腕を首に回して抱きついてくると、「こうして裸で抱き合うのって気持ちいいよね」と穏やかな笑顔を浮かべた。俺の胸板で潰れる薫の乳房は、柔らかくもしつかりした弾力で押し返してくる。マシユマロを水風船にしたらきつとこんな感触だろう。そんな幸せな柔らかさに包まれながら、疲労感を伴ったまどろみに意識が溶けていく。

翌日。昼休みも半ばを過ぎた頃に食堂へと駆け込む。既に昼食を終えた同僚達はすれ違いに食堂を出て行く。席はもう殆どが空いている状態だ。カウンターで日替わり定食を注文すると、トレイを持ってどうせならと窓際の席を選んで腰を下ろす。「いただきます」

閑散とした社員食堂で、一人静かに食事を進めていくが、どうにも砂を噛んでいるように味気無い。どうしても昨晩の事を思い出してしまふ。情けない我が身を振り返り、ため息が漏れる。

「どうしたよ」

唐突に机にトレイが置かれる。自分と同じ定食だ。声を追って見上げるまでもない。声の主は隣の席に腰を下ろすと、俺に向かって爽やかに白い歯を輝かせた。

「お疲れ様です藤田先輩。遅い昼休みですね」

「ちよっとごたごたあって遅れちゃった。ほれ。桜田主任も一緒」

その声と同時に、桜田主任が目の前席の席に腰を掛けながら、「同席して構わんか？」と尋ねてくる。

「勿論ですよ」

相変わらずパンツースーツが似合うお方だ。眼鏡を外して机に置く動作もいちいち

洗練されている。彼女を一言で表すなら『颯爽としている』に限るだろう。まるで風のような。爽やかだったり優しかったり、そして厳しかったり。彼女の前に置かれたトレイの上に置かれた、大盛りの豚骨ラーメンがお洒落な Pasta だったなら、そのイメージも盤石だったことだろうと苦笑いを浮かべる。

「相変わらずですね」

「ん？ 何がだ？」

桜田主任はきよとんとしたままお絞りで手を拭いている。

「ラーメン好きですね」

「ああ。まあ。これが無いと私の一日は始まらない。ガソリンのようなものだ」

不敵ににやりと笑みを浮かべる。豪快にラーメンを啜る姿すら知的に映るのが彼女くらいだろう。

「それなら朝食ってこればいいのに」

隣から藤田先輩が口を挟んできた。

「確かにそうだな。しかしそれは旦那が許してくれないんだ」

「まあ朝から隣でラーメン食われたら鬱陶しいかな」

「だろうな。だから私も家では自重しているよ。ちよつとした配慮が仲睦まじい夫

婦生活のコツだ」

軽口を叩き合う二人をよそに、俺はもそもそと食事を続ける。その様子にいち早く気付いたのは流石に付き合いが長い藤田先輩だった。

「どうしたよ。なんか元氣ないな。薫ちゃんと喧嘩でもしたか？」

一瞬の躊躇いの後に返事。

「いやそんな事は無いですよ」

しかし今度はその逡巡を桜田主任が見逃さない。箸を止めると、こちらを伺うように釣り目がちな目を向ける。

「相談はいつでも受け付けているぞ？ 私に言い辛いなら藤田君にでも良い。とにかく一人で抱え込むのだけは止めてもらいたい。これは上司としての忠告ではなく、お願いだ」

そんな事を真顔で言ってくるものだから堪らない。ともすれば嫉みの矛先を向けられやすい彼女の立場だが、遥か年上のお局さん達からも人望を得ているのは、こういう飾り氣の無い誠実さを見せてきてくれるところだろう。

「そうだぞ。なんたって俺とお前は会社公認の恋人なんだからな」

王子様然とした外見でそんな事を口にする藤田さん。彼も彼なりに、俺を氣遣っ

て馬鹿な事を言ってくれてるのがわかる。引き締まりすぎた空気をほどよく和ませる。藤田先輩と桜田主任は、ケーキとコーヒーのようなコンビだ。お互いの良さを強調しあっている。

「別に何があつたつてわけじゃないですよ」苦笑いを浮かべて弁解しつつも、どうせだったらと相談に乗ってもらうことにした。

「桜田主任つてもうご結婚されてますよね？」

「ああ。私も君と同じ時期だったと思うぞ」

「え？ そうでしたっけ？ すみません。知りませんでした」

「気にするな。君と仕事で関わるようになったのはここ最近だしな。知らなくて当然だ」

そこまで聞いて、何をどう切り出せば良いのか分からないことに気付く。まさか『勃起しないんですけど、主任の旦那さんは大丈夫ですか？』などと口走るわけにもいくまい。

二の句が継げない俺を氣遣ったのかどうかはわからないが、藤田先輩が再び口を挟んできた。

「へえ。じゃあ桜田主任も新婚ホヤホヤなんすね」

「何か不満そうだな？」

「いえ別に」

「こう見えてもデスクの引き出しに夫の写真くらいは忍ばせてあるぞ」

「へえ」

俺と藤田先輩は声を合わせて感嘆する。仕事以外には興味の無さそうな、典型的なキャリアウーマンだと思っていたので意外だった。

「仲良いんですね」

「腐れ縁というやつだ。私のところは中学時代からの付き合いでな」

「そりやすごいっすね。そんなだけ続くともう倦怠期なんて在ってなきが如くだな」

藤田先輩が感心するように独りごちた。

倦怠期という単語に胸が締め付けられた。

「ふん。確かにな。昔から一緒に居るのが当たり前存在だったよ」

涼やかにそう言い切る彼女の表情からは、穏やかで充実した結婚生活が見て取れた。発言内容だけだと惚気にも聞こえるが、そんな茶々を入れるきにもなれないほど清々しい言い草だった。

そんな彼女に「白石君のところはどれくらいなんだ？」と問いかけられた。

「大学入ってすぐだったので……六年ですわね」

「俺のおかげで付き合いましたんだよな」

隣で感慨深そうに腕を組んでうんうん頷き出す藤田先輩。俺よりも先に桜田主任が呆れ顔で反応する。

「なんだそのあからさまに恩着せがましい口調は。白石君も上司だからといって遠慮することはない。がつんと言ってやれ」

「いや、その通りなんで反論出来ないんですよ。実際鬱陶しいですけど」

「そうそう。わかっているじゃな……え？ 鬱陶し、え？」

「告白するかどうかでうじうじしてるところを、先輩が背中押してくれたんですよ」

「なんだ。たまには先輩らしいところもあるんじゃないか。藤田君。見直したぞ」

「たまに？ え？ え？」

「しかしそれだけ長いと喧嘩の一つや二つもするだろう？」

桜田主任からは明らかに、こちらの問題を「デリケート」に探る様子が伝わってくる。

「そう言われると……喧嘩ってしたこと無いような気がします」

藤田先輩は仕切り直しと言わんばかりに大きく咳払いをすると、「お前も薫ちゃんも、言いたいこと言うタイプに見えて、結構気遣い屋さんだもん」と我が物顔

で言った。

確かにその通りだ。俺はともかく、薫は皮肉屋で飄々としてマイペースで、どうでも良いようなことはケラケラと俺を馬鹿にして笑う。でも本当に大切なものは慎重すぎるほどに遠巻きに眺める。俺と薫が喧嘩をしないのは、お互いを思いやっているとという好意的な解釈だけでは説明出来ない。きつとどちらも臆病なのだろう。

桜田主任は顎に拳を添えると、「そうか。けして悪いことではないのだろうが、あまり溜め込むのも良くはない気がするな」と小難しい表情で言った。まあ元々がいつも眉間に皺を寄せているような人なので、これが素の表情なのかもしれない。

「桜田主任殿でも歯切れの悪い物言いになることがあるんですね」

藤田先輩がからかうようにそう言う。しかし彼女が動じる様子も無い。あくまで静謐な面持ちでラーメンのスープをレンジで掬う。音も無くそれを上品に嚙下した。

「それはそうさ。私に出来るのは勉強や仕事といった答えがあるものだけだ。男女のことなぞ一生掛かってもわかる気がしない。それでも生涯を共にしようと誓った相手なのだから、理解しようとする努力はするさ」

「白石のところは違って、言いたいことはずばつと言いあう。って感じですか？」

桜木主任はその問いに、「私はな」と答えて、微かに口端を持ち上げた。

「でしょうね」

「しかし思いが強ければ強いほど、臆病になってしまいう事もあるのだろう。恥じることはないさ。私も夫の事に対しては平常心でいられなくなる時もある」

彼女のその言葉に、俺と藤田先輩は顔を見合わず。

「まさか社員食堂で桜田主任から惚気を聞くことになるとは思いませんでしたよ」

藤田先輩が俺の心の声を代弁してくれると、桜田主任は微かに頬を染めて、「失言だったな。忘れてくれ」とそれでも芯の強い口調で受け応えた。先ほどの言葉は身が入りすぎて、ついっいうっかり漏れてしまったもの、という印象を受ける。部下の相談にここまで親身になってくれる人はそうはいまい。根っから真面目な人なんだろう。どうも俺は、先輩やら上司には恵まれる運勢らしい。そんな事を考えながら横の藤田先輩に視線を向ける。すると机の上に置いてあった彼の携帯が鳴った。

「お。商談先だ」

藤田先輩は通話先と笑顔で会話しながら席を外していった。その様子を桜田主任と見送る。

「今度の取引も上手くいってるようですね」

「ああ。彼は大したものだよ。ああいった人当たりの良い営業は私には真似出来ない

い。他人との間合いを測り、そして詰める技術は天性のものだろう。いつの間にか相手の警戒を解き、懐に入っている。脱帽ものだな」

「無駄に見た目も良いですからね」

「そのようだな。女性社員の部下もいつも彼に対して黄色い声を上げている。王子様だったか貴公子だったか。そんな渾名、普通なら皮肉で使われそうなものだがな」
そのようだな、ということは桜田主任のタイプでは無いのだろうか。喉まで出かかったその質問は、流石にセクハラだろうと思ひ飲み込んだ。

しばらくすると藤田先輩が満面の笑顔で戻ってくる。

「いやあ今回も上手くいったよ」

入れ違いで食事を終えた桜田主任が席を立つ。

「流石だな。このままでは私もうかうかとはしていられん」

「またまた。桜田主任のご指導あつてのもんですよ」

「私が君に教えた事など何一つ無いよ」

彼女は同僚の手柄を誇らしげに祝福して去って行く。どこまでも男前な人だ。

「えー。もう行っちゃうんですか？ もっと俺を褒め称えてくださいよー」

「君に賛辞を送る機会はこれからいくらでもあるだろう。今はこれにはまってるん

でね。失礼するよ」

彼女の片手にはスマホが握られており、その液晶にはゲーム画面が表示されていた。

「へえ。桜田主任でもスマホでゲームとかするんだ」

俺が驚くと、藤田さんが席に腰を下ろしながら言った。

「昼休みは結構やってるらしいぞ」

「へえ意外ですね。というか藤田先輩最近絶好調じゃないですか」

「まあな。なんかお祝い寄せ」

「はい。じゃあコロツケ一つ取って良いですよ」

「要らんわ。というか今回はむしろお前にお礼言わなきゃいけないくらいだしな」

「え？ 何ですか？」

「お前に頼んだ資料あったら？ あれ結構評判良かったからさ」

「じゃあなんで最初にお礼催促したんですか」

「なんか流れで」

「感心して損しましたよ」

「まあそう言うなよ。今晩暇か？ 晩飯奢ってやるからさ」

その申し出を快く受諾しようとしたが、その瞬間昨夜の失態が脳裏をよぎる。昨日の今日で夕食とか、なんだか申し訳ないような気がした。

「……いや。薫が待つてると思うんで」

「なんだよ付き合いい悪いな。上司の誘いより新妻の手料理とはサラリーマンの風上にも置けない奴だお前は」

「無茶言わないで下さいよ」

「よし。じゃああれだ。薫ちゃんも誘って良いぞ。久しぶりに三人でメシ食うか」
それだと確かに何の問題も無い。ちよつとした同窓会みたいなものだ。

「本当ですか？　じゃあ早速薫に連絡しますね」

「おお。しろしろ。俺も薫ちゃんと会うの久しぶりだな。結婚式以来か？」

彼が言うとおり、俺と薫が付き合う事が出来たのは、彼の協力があつたのが大きい。それは薫も知っているし、二人で内心感謝していたりする。

「そういえば桜田主任の旦那さんってどんな人なんですかね。やっぱ同じくらい完璧超人なんですかね」

「どうだろうな。意外とヒモみたいな主夫抱えてんじゃね？」

携帯がメールの着信を知らせたが、あたしの腕はテーブルに肘をついたまま動かない。ちかちかと光るランプを頼杖ついたまま横目で眺めるだけだ。

平日昼過ぎの喫茶店は客もまばらで、話し声よりも外を走る車の排気音のが大きいくらいだ。

「出なくて良いの？」

百合が首を傾げて気に掛けてきてくれる。枝毛とは無縁な長く緩やかなパーマが掛かった黒髪がふわりと揺れた。以前彼女を真似してボディパーマを当てたが、あたしの髪の毛は勝手にツンツンと真っ直ぐ伸びては外に跳ねる。名は体を表すとは言うが、身体は内面を表すのだろうか。昔から如何にもおしとやかで、でもそういうった雰囲気は鼻につかない、生まれながらの女の子な翔子を、あたしはずっと羨望していた。あたしだって女の子らしくしたいって思うことぐらいある。ふりふりのエプロン着けてお菓子作って、ゴキブリが出てきたらきゃーきゃー狼狽えたい。でも駄目なんだ。そういう柄じゃない。あたしって昔から無愛想な上、可愛げが無い人間なんだ。まあ二十六歳を女の子と呼ぶかはさておきとして……。

「旦那だったりして」

美香子にもひひ、と昔から何一つ変わらない小悪魔的な笑みを浮かべる。いつも通り真横で結ったサイドテールが似合っている。ともすれば幼稚にすら思われる危険性を孕むその髪型は、もともと幼い顔つきの彼女にはよく似合っていた。

美香子は美香子で大雑把かつぶつきらぼうな性格だから、女らしさの欠片も無いはずなのに、何故かその言動は逆に彼女の女としての愛くるしさを強調している。単純に顔つきが可愛いからだろう。小柄な上にくりくりとした目鼻立ちは小動物そのものだ。そして何よりそんな飾り気の無い美香子の性格も、やはりあたしにとっては劣等感を抱かされる対象だ。

とはいえそんな二人は親友だ。敬うことはあっても、嫉むようなことはない。

しかし百合のような淑やかさが無ければ、美香子のような愛嬌も無い。そんな二人に囲まれていると、ふと自分がひどく詰まらない女じゃないかと思ってしまう。人間としての自分ではなく、女としての自分は、どうにも自信が持てないでいる。

どこか中途半端。それが自分に対する批評。親しい人間以外は信用出来ず、かといって最も近い人は傷付けあいたくなくて臆病になる。普段あたしが振る舞っている淡々とした自分は、別に演じているわけではないけど、他人との距離感を気にす

るあたしの内面が無意識に影響しているのかもしれない。

「はあ」

勝手に溜息が漏れる。

「何よその『早く悩み聞いてよ』って感じの溜息」

「早く悩み聞いてよ。さっきから何回サイン送ってると思ってんの」

「ええ。面倒臭いなあ、どうしようかなあ」

そう言いながらストローでオレンジジュースを吸い上げていく美香子の隣で、百合は微笑みながらアイスコーヒーをゆっくりと掻き混ぜる。氷のぶつかり合う音まで穏やかで心地良い。

「またそんな意地悪言うんだから。薫。何かあったの？」

百合の声を聞くと眠気が誘われるほどに落ち着く。

「別に何かあったってほどじゃないんだけどさ……」

「珍しく歯切れ悪いじゃん」

何かを言い淀む時にはいつも美香子が鋭く突っ込みを入れてくれるのが助かる。

彼女の軽快な雰囲気に乗せられて、するすると想いが口から漏れていく。

「……あのさ、あたしってぶつっちゃけどう思うっ？」

「は？」

「え？」

「だからさ。女として魅力あると思う？」

「知らんわ。アタシ達ちんこ付いてないし」

百合が苦笑いを浮かべる。

「またそういう……あの、私は薫すごい魅力的だと思うよ。さばさばしてるっていうか、物怖じしないっていうか」

「それ女としての褒め言葉かな？」

「あ、う……でも私、薰みたいな女の子に憧れるよ。いつもてきぱきしてて。私、一人じゃキャッチも断り切れないくらいとろくさいから」

百合は柔和で気配りも出来るが、心にも無いお世辞は言わない。その言葉は素直に嬉しいと思った。憧れているのはこっちの方だ。

「ていうかおっぱい大きいじゃん」

そんな和やかな余韻を吹き飛ばす美香子の一言。虫も殺せないような顔をして、平気で下ネタを口にする。とはいえ彼女のそういうところは、あたしは逆に気に入っているんだけど。だから問題はその言葉じゃなくて……。

「いやあんたのが大きいでしょ」という事実。

胸には結構自信があるんだけど、二人ともあたしより大きい。だから大昔、旦那と付き合う前に、皆で海に行った時は色々大変だった。もっと露出多いの買えば良かったって本気で後悔した。旦那の目を釘付けに出来ると思っていたら、とんだ伏兵が身近に二人もいたのだ。

「まっまっ。女は胸じゃないよ。そう凹むなって」

美香子が得意気な顔であたしの肩を叩く。

「あんたが言ったんでしょ」

「でも何でそんな事聞くん？ あ、もしかして……」

美香子の口元がにやあつと釣り上がる。こういう時は勘が良い。まああたしも自分から言い出しづらいから、こうやって指摘された方が楽なんだけど。そういう意味でも美香子は貴重な親友だ。百合とあたしただだと、気を使いすぎて中々核心をつけない。

「倦怠期ってやつ？」

その言葉が重く胸に突き刺さる。他人にそう言われると、思っていた以上に酷くダメージを受けた。

「ま、まあ……そんな感じ、かな」

「なんだよ。それくらいかよ」

「む。それくらいってなによ」

「もつと浮気とかそんなんかと思った」

「浮気？ 誰が？ 誰と？」

「そりゃ旦那と王子とか」

「あのねえ……それ昨日もウチで話題になったけど、旦那結構怒ってたからね」

「おお怖い怖い」

「まあまあ。とにかく倦怠期なんて誰もが経験するものなんじゃないの？ そんな思い詰めるものでもないと思うよ？」

百合がのんびりと間に割って入る。

「そうは言ってもさあ……あたし達みんなそうだけど、結婚してまだ一年くらいでしょ？」

「まあね。押しも押されぬ新妻ってやつだね。でもそれこそ皆そうだけど、結構付き合い長い相手ばっかだからあんまり結婚した実感って無いよね。新鮮味って

60」

「新鮮味……か」

「何よ？ どれくらいしていないん？ お姉さんに言ってみ」

ゴシツプ好きな美香子が目敏く本質を見破ると、仔猫のような瞳を爛々と輝かせ身を乗り出す。

あたしはテーブルに顔を突っ伏して、黙ったまま指を全部開いた片手を上げる。

「え？ マジで？」

その体勢のままこくりと頷いた。

「それは酷い」

美香子に続き、「つ、うくん」と百合も小さく唸っていた。

「ていうかアタシなら、新婚でそこまでほっとかれたら絶対浮気するわ」

あたしはその言葉を鼻で笑い飛ばしながら顔を上げる。

「よく言うよ」

「いやするね。百人斬り達成しちゃうね。今九十九人だから」

「はいはい」

二十歳くらいまで処女だったくらい性に臆病だったのにね、なんて事は言わないであげる。

彼女はやたらと自分が性経験の多い人間だと誇示したがる。

しかしあたしは偶然彼女の中高生時代の知人と話をする機会があったのだが、もう男遊びどころか極度の男性恐怖症というか恥ずかしがり屋で、たとえお爺ちゃんのような先生でも授業中に指されると、顔をリングのようにして硬直してしまっていたらしい。なので在学中は、男性教師は彼女に話しかけないという暗黙の了解すら出来ていたとのこと。コンビニでも店員が男だと買物すら困難だったと聞いた。しかし当然この容姿でモテないわけはなく、押し寄せる異性の大群は余計に彼女の男性に対する苦手意識を悪化させた事は想像に難くない。

しかし大学に入ってからには漸く慣れて少しづつ改善されたようで、特にその時知り合った今の旦那さんはとても穏やかで接しやすいい人で、彼女が男性に対しての耐性をつけた大きな要因だったというのは疑いの余地は無い。

その彼と付き合ってからそのままゴール。なので当然経験人数も旦那さんだけだろう。美香子のお姉さんぶりたい気質は昔から変わっていないが、その誇張は素敵な女性とはまた別のベクトルだろうに。大体黙ってたら普通に可愛いんだから。学生時代にまともに男性に接する事が出来なかった事に対して劣等感でも抱いているのだろうか。彼女が先天的に持つ魅力を考えれば、なんとも贅沢な悩みだと思え

る。

「いや九十九は言い過ぎだけど、二十人くらいは経験あるからアタシ！ もう千切つては投げ干切つては投げてきたから！」

「ていうか美香子のところずっと旦那とラブラブじゃない。倦怠期なんて無いでしょ？」

「は、はあ？ もう倦怠期だらけだし！ 愛想つかして浮気しまくりだし！」

「毎朝いってらっしゃいのキスしてるってこの前言ってなかった？」

「ま、まあまあ二人とも……。でも浮気云々は置いておいても、ちよつとそれは寂しいね」

百合も美香子の大言壮語には慣れているのもう指摘すらしない。しかし百合に肅々とそう言われると、なんだか問題が大きい気がしてきた。

「ね？ 百合だつてさあ、半年近くもほつとかれたら浮気するっしょ？」

百合は頬をほのかに染めて、困ったように眉を八の字にする。

「う、うん。浮気はどうだろうね……。すごく寂しいな、とは思っただろうけど」

私は百合がその問いかけに、絶対しない、とはっきり否定しないことに驚いた。そんなもんなのかな？

これって普通はもっと怒ったり、寂しがったりするもんなんだろうか。

残業で疲れてるってのは知ってたし、でも休日くらい……それにやる気を見せてくれた昨日だって。

でもやっぱり旦那を一方的に責める気にはなれない。

「あたしって、やっぱり色気無いのかな」

つついっいそんな愚痴が出る。

「いや、結構エロい身体してると思うよ。マジで」

美香子がけらけら笑いながら言う。

「何目線なのよそれ」

苦笑いを浮かべながらようやく携帯を覗いてみる。どうせ旦那じゃないだろうし。

こんな時間にメールなんて今まで無かった。

と思ったら旦那だった。慌てて返信する。

「慌ててどうしたの？」

「旦那だった」

「へく。何て？」

「王子が今晚奢ってくれるから、三人で外食しようって」

美香子がオレンジジュースで咽せる。

「お、マジで？ 懐かしいね王子」

「そういえば、薫の旦那さんと一緒の職場だったっけ？」

「うん。そう」

「薫の結婚式で見たけど、相変わらずの王子っぷりだったよね」

「そうだね。これぞ王子、って感じだったね」

元同窓生で思い出話に華を咲かせていると、百合が驚きの一言を発した。

「美香子も昔は結構良いなって思ってたんでしょ？」

「止めてよ。大昔の話で一瞬だけだったば。大学の入学式の際に一瞬だけ良いなって思っただけ」

二人の会話は寝耳に水だった。美香子ってそうだったんだ。まあ一目だけなら格好良いって思えるかな。そういえば藤田ってモテるわりにはそういう話聞かないな。まあどうでも良いけど。いやまさか本当にうちの旦那と……いやいやいや。

「……はあ」

「何よ乗り気じゃないじゃん」

どうせだったら二人で外食したかったな、と思ったけど口にするのは止めた。惚

気と思われるのも嫌だし。まあ惚気なんだけど。……ああもう。こーいうところも可愛げ無い。そりや旦那も興奮しないよ。

厳しい残暑が続いていたとはいえ、暦は秋へと向かおうとしていた。日が暮れるのもずいぶん早くなった。窓から見える街中の風景は、すっかりと街灯によってのみ照らされている。

「で？　なんであんたしか居ないわけ」

テーブルを挟んで向かいに座る、元同窓生であり、旦那の上司でもある藤田に向かって顎をしゃくり上げる。

「だってしょうがないじゃん。あいつ急な仕事頼まれちゃったんだし。ていうか薫ちゃんにも連絡来てただろ？」

「……はあ」

わざと大袈裟に溜息をつく。

「そんなテンション下げらなつて。ほらほら。古い友人どうし仲良くやろうぜ」
人なつっこい笑みを浮かべながら、ワイングラスにお酒を注いでくる。

「藤田が請け負ってあげりゃ良かったんじゃないの？　上司としてさあ」

それを受け取りながらも、妻として文句の一つも言ってる。

「んなこと言われてもなー。俺の管轄外だししょうがないっしょ。まあそのうち来るよ。そんな時間掛かる仕事じゃないし」

「はあ」

今度は無意識に出てしまった。

「なんだよそんな俺と二人が嫌か？」

藤田は苦笑いを浮かべる。

「いや、ごめん。さっきのは違う」

流石に弁解した。あたしは藤田を気に入ってるわけではないが、嫌っているわけでもない。むしろ旦那と仲が良く、仕事上でもお世話になってるのはわかっているから、感謝こそすれ邪険にする謂われはない。ただ大学時代からの友人なので、気兼ねのない感情表現が出来るというだけ。

「なんか、最近じっくり来ないなあって」

「白石と？」

「……べつにー。ていうか、あたしも今は白石なんですけど」

「そういえばそうだった。なんか未だに慣れないな」

はにかむように笑う同窓生の顔を見て、変わらないなこいつは、と懐かしい気持ちになる。典型的な遊んでそうな優男なのに、異性に対する警戒心を抱かせない人なつっこい笑顔。

「ま、ま、今日は飲めよ。旦那も遅れてくるんだし。俺が相談に乗っちゃる」

「冗談」

鼻で笑いつつも、一口飲んだお酒が意外と美味しかったので、グラスをもう一度傾ける。まあ確かに、旦那も後で来るらしいから、ちょっとくらい良っか。

「落合さん。これでどうですか？」

「おう白石。見せてみる」

彼に修正した書類を見せると、俺は腕時計をちらりと覗いた。もう食べ終わっているころだ。まさかここまで修正を繰り返されるとは思っていなかった。いつの間にか残業当初とは関係無い仕事までやらされている。とはいえまだまだ皆忙しい時期なので、俺だけが甘い事を言っていられない。とはいえ薫は怒っていないだろう

か。それだけが気がかりだが、一人で待ちぼうけをさせているわけじゃないのだけが救いだ。藤田先輩とは知らない仲じゃないんだし。

「どうした？ 時間が気になるか？」

温厚そうな四角い顔に、申し訳なさそうな苦笑いを貼り付けて聞いてくる。

「いえ大丈夫です」

「今日は藤田と飲みに行く予定だったんだっけか？」

落合さんは平社員ではあるが、藤田先輩よりも年上で昔から親交があるので彼のことを呼び捨てで呼ぶ。彼は確か桜田主任と同期だったはずだから二十八歳だ。藤田先輩とは高校時代の先輩後輩だったらしい。

「折角の奢りだったんで残念でしたけど」

俺も冗談めいた軽口を叩ける程度には親交がある。

「あいつは金は持つてるからな。また何時でも奢ってもらえ」

そう言つて豪快に笑うと、落合さんは「それにしても悪いな。こんな時間まで掛かってしまうとは思っていなかったんだ」と後頭部に手を添えながら軽く頭を下げてきた。その見た目通り誠実かつ実直な人なので、頼みこまれると断りづらい。新人の頃からお世話になっている恩もある。やたらと面倒見が良い人なのだ。

「いえそんな。仕方無いですよ。それよりぱぱと終わらせちゃいましょう」

食事にはもう間に合わないことを覚悟する。薫には後で謝ろう。話せばきちんとわかってくれる人だ。薫は常に感情的にならず理性的だ。そこが魅力的でもあるが、たまにはもっと腹を割って話したいとも思う。俺の方も説明すればわかって貰える、彼女の懐の深さに甘えてしまっている部分は否めない。

「だかりやね……フーフってのは、あんたが思ってるような生ぬるいもんじゃないの。わかってんの？ ああん？」

「わ、わかった。わかったから薫ちゃん。ね？ そろそろお開きにしようか？」

「はあああっ！？ にゃーに言ってるの。夜はこれからでしょーが！ ほら注ぎなさいよ」

「は、はは……薫ちゃん、こんな酒癖悪かったっけ？」

「ああっ！？ 何か言ったあ！？」

「いえ、なんでもありません」

「まったく……旦那は来ないし……もう最悪」

テーブルに突っ伏すと、酔った額にひんやりと心地良い感触が伝わる。

悪酔いしているのは自覚している。でもこうでもならなきゃやってられない。自分で思っている以上にストレスを溜め込んでいたのかもしれない。相手が藤田だけというのも大きいだろう。ある意味、最も気を使わなくて良い相手だ。旦那ではこうはいかない。旦那には嫌われたくないから。だから取り繕う。幻滅されないように余裕のある年上の女性像を。でも可愛く装うことはなんだか憚れる。中途半端に「あ、白石ちよつと無理そうだったさ。午前様になりそうかもだった」

「え、ええええ！？　なんで？　なんでなんで？　旦那から連絡あったの？」

「いや違う違う。落合さんって先輩が居て、その人と一緒に残業してんだけど、そこからの情報」

落合？　ああ、旦那が新人のころお世話になったって人だっけ。何度か会ったことがある。顔が大きくて、優しくうな人って印象が残ってる。でもちよつと押しつけがましい印象も受けた。無理矢理恩を売るタイプっていうか。ううん駄目駄目。旦那の知人を悪く言うとか良妻失格。旦那は義理とかに弱い人だから、きつと断り切れないんだろうな。まあ、そういうところも、好きなだけ好き。

藤田のその言葉と同時に、あたしの携帯も旦那からのメール着信を知らせる。藤田が説明したとおりの文章がそこには書かれていた。

途端に身体から力が抜ける。

「……ふえ……寂しいよ……」

無意識に本音が漏れる。会いたかった。毎日一緒だけど、それでも顔を見たかった。美味しいご飯と美味しいお酒で、楽しい時間を共有したかった。でも、こんなだらしない姿を見せなくて良かったとも思う。あの人はそれくらいで幻滅したりしないだろうけど。年下のくせに、心が広くて、あたしなんかよりよっぽど大人な旦那様。

あの人の事を考えると寂しさと同時に、すごくすごく幸せな気持ちに包まれる。彼と出会えて良かった。彼と結ばれて本当に良かった。

ああ、酔いが一気に回ってきた。

緊張感が一気に抜けたからかな。

この食事の為に、結構おめかしもしてきたから。普段は似合っていないと思うから、恥ずかしくてあんまり着ないけど、旦那が好きだって言ってくれてる短めのフレアスカートだって。もしかしたら、帰りにラブホテルとかに誘ってもらえるって期待

してたりもしてたし。……馬鹿みたい。

意識と身体がふわふわしてくる。

藤田が肩をゆさゆさと揺らしてくる。

やめてよ……眠いんだ……ってば……。

薫にメールを送るが返信は来ない。やはり怒ってるのだろうか。仕事に集中しながらも、つついっし携帯に視線をやってしまう。それに気付いたのか、落合さんがこちらの機嫌を伺うように、「嫁さん怒っちゃったか？」と尋ねてきた。

「いやあ。どうでしょう」としか答えられない。

普段なら嫌みの一つで済むだろうけど、昨晚（とういかここ半年）の事もあるの
で、いい加減本気で怒られても仕方が無い。

少し本気で心配になり出した頃、携帯が先輩からの着信を知らせた。

落合さんに黙って目配せをすると、それだけで察してくれたのか、「いいぞ」と
頷いてくれた。

早速その場で電話を取る。

『もしもし？ 俺俺。藤田だけど』

「はい。白石です」

『お疲れ。どんな感じ？』

「いやあ。まだまだですね……あの、薫は？」

『それがさあ、酔いつぶれちゃってさ』

「え？ マジですか？」

『ああ。酔いが冷めるまで俺ん家置いとこうか？ 店のすぐ近くだし。お前が帰る時途中で拾っていけるだろ？』

確かに藤田先輩の家は、会社からの帰宅途中に寄っていける。

「そうですね。お願いできます？」

『ああ任せとけ。それにしても悪酔い酷かったぞ。昔から酒弱かったけど、あんな絡み酒初めてみたわ』

「……怒ってました？」

『いや、そんな感じは無かったけど……でも寂しいって連呼してた。もうマジでしつぱーくらい』

「マジっすか……」

『ま、とりあえずうちで寝かしておくから、帰りに拾ってけよ。あとどれくらい掛かりそうだ？』

「ん〜。まだ何とも言えませんね」

『そうか。まあなるべく早くな。あんまり遅いとセクハラするぞ』

「蹴り殺されますよ」

『その時は骨を拾ってくれ』

「いやセクハラを止めてください」

いつも通りの会話に笑って電話を切る。

「どうだった？」

「とりあえず大丈夫そうです。嫁が酔いつぶれちゃったんで、藤田先輩が介抱してくれるって」

俺のその言葉に、落合さんが怪訝そうに眉間に皺を寄せた。

「おいおい大丈夫なのか？」

「うちの嫁、酒弱いんですよ」

「いやそうじゃなくて、他の男の家で二人つきりだぞ？」

最初は何を忠告されているのかわからなかった。よくよく考えてみると確かにそうだ。しかしそう言われても、あまりピンと来ない。藤田先輩と薫に何かあるとはとても思えない。それは二人の関係性もそうだが、俺は藤田先輩を心から信頼していることに改めて気付いた。彼が俺の嫁に手を出すなんて話、可能性すら頭に浮かばなかった。それは彼との長年の付き合いによる信用もあるが、それと同じくらいに、なんとというか、彼から性欲を感じたことが無いのが大きな要因だ。異性に対して何か特別な感情はおろか、そんな視線すら感じたことがない。浮いた話の一つすら耳にしない。だからこそ、俺との同性愛疑惑なんてものまで掛けられるんだろ
うが。

「大丈夫ですよ」

俺は笑顔で返した。何の強がりも不安も無い。大体俺と薫を強く引き合わせたのは藤田先輩なのだ。言うなれば仲人だ。

「そうか。まあ藤田がお前の嫁に手を出すわけないわな」

「そうですね。それにもしその気なら、わざわざ馬鹿正直に俺に酔いつぶれたなんて報告しないでしょ」

「それもそうだ。お前本人に手を出すことはあるかもしれんが」

「落合さんまで……勘弁してくださいよ」

「はっはっは。悪い悪い。しかし俺だったら、あんな綺麗な嫁さんが他の男と二人で居たら気が臭じやないかな」

「まあ、確かに綺麗ですけどね」

したり顔を浮かべながら視線を机の上の書類に落とす。落合さんの痛快そうな笑い声が耳に届く。

「言うじゃないか。俺が独り身と知っての言葉か？」

詳しくは知らないが落合さんはバツイチだと聞いていた。こんな人柄の良さそうな人でも上手くないかなんて、夫婦生活はやはり難しいのだなと実感する。

二人の乾いた笑い声がしんと静まり返った職場に響いた。むしろ俺としては薫が先輩に迷惑を掛けていないかという心配の大きい。それにしたって最愛の嫁の無防備な寝顔を他人に見られるのは癪だ。早く終わらせて迎えに行こう。それで今日こそは押し倒して、男らしいところを見せてやろうなんて意気込みが、キーボードを叩く音をより一層強くさせる。

そんな俺の机に不意にコーヒーが置かれた。顔を上げると桜田主任が立っていた。

「あ、お疲れ様です」

「まだ掛かりそうか？」

「まあ……多分」

「そうか。あまり根を詰めるなよ……それと」

桜田主任は遠くの落合さんをちらりと横目で視線を向けると、「やれやれ。落合君の尻ぬぐいか」と小さく溜息を漏らした。

「悪い人間ではないのだからがな……少々手際が悪いのが玉に瑕だ」

そう言い残すと彼女は颯爽と去っていった。

それを見計らって落合さんが再び傍に寄ってくると、「どうせあの女が何か言っていたんだろ？　ちよつとばかし出来るからって偉そうにしやがってな。女の癖に主任なんて……」と嫌悪感を露わにして言い放つとすぐに席へと戻っていく。

俺は桜田主任が偉そうだという風に思ったことは無かった。一見冷淡にも見えるが机の隅に置かれたコーヒーはまだ暖かそうに湯気が立っている。机の引き出しにも旦那さんの写真を常備している一面だつてある。

その反面、確かに落合さんの仕事ぶりは俺から見ても効率が悪く、彼がまだまだ昇進の噂すらないのがわかってしまった。けど悪い人ではない、はず。

……んん。

なんだか、身体ふわふわする。

ちよつと気持ち悪い……。

なんだっけ？

そうだ……旦那が来ないから、ついつい自棄酒が進んで……。我ながら情けない……潰れるまで飲むなんて。学生じゃないんだから……。でも、まだアルコールが残ってて、どこか朦朧としている意識でもはつきり響く渡る感情。寂しい。でもだからって、お酒で紛らわすなんて……馬鹿みたい。

「あっ」

え？

何さっきの声。

誰？

「や……んん」

あたし？

嘘。

こんな甲高い声、あたし出せたっけ？

何か、触られてる。

ごっごっした手。

硬い身体。

……。

なんだか、ほっとする。

逞しい感触。

ていうか……あたし裸じゃん。ベッド？ 薄暗い。旦那？ 太股に当たる感触。

これ、勃起したおちんちん？ やだ。本当に？ 嬉しい……。やばい。泣きそう。

「あ、はあ……ん」

どうしよう。変な声じゃないかな？ 久しぶりだから、こういう時の声の出し方

忘れちゃった。

くちゆくちゆと湿りきった音が聞こえる。

うわ、あたし、もう滅茶苦茶濡れてるじゃん。指であそこで擦られただけで、す

「ごい音鳴らして……。恥ずかしい……。でも、仕方無いよね。ずっとご無沙汰だったし。

あ、両足開かされた。

挿れてくれる、の？

やって入ってきてくれる？

もう本当泣きそうなんだけど。ずっと寂しかったんだからね。こんな好きなのに、全然相手してもらえなくて。馬鹿。アホ。甲斐性無し。大好き。愛してる。

「あ、ちょっと待って。ゴム……」

馬鹿馬鹿馬鹿。何言ってるの？ そんなの要らない。ていうかこんな事、恥ずかしくて絶対言えないけど、こっちはあんたの子供欲しくて仕方無いんだから。本当……大好きなんだから。

「そのままでもいいから……。早く、来て」

思わずそう口にする。

うわ。なんかすごいエッチな事言っちゃった。でも良いよね。酔っちゃってるし……。……。ん？ ちょっと待って。何さっきの声？ 旦那じゃ……。無い？ それに……。……。何か見覚え有る。

意識がやや明瞭になるにつれ、触れてくる指の感触なども明らかに違うことがわかる。

なにより……今まさに目の前でゴムを着けられようとしているおちんちんは、どう見ても旦那より大きいものだった。

「え？ 生で良いの？ マジで？」

藤田だった。

「……ア、ア、ア」

「ラッキー」

「アホか……」

あまりに突飛で現実感の無い状況に、叫び声を上げる気力すら沸かない。溜息交じりの呆れ声が出るだけ。

夢？ ……じゃない。

なんで？ なんでこんな事になってんの？

「じゃあ、このままで」

じゃあ、じゃない！

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよと待って」

「え？」

「ゴム！ ゴムゴムゴム！」

「ああ、やっぱりした方が良い？」

いやそうじゃなくて。いやそうだけど。いや前提が違う。混乱。困惑。残ったアルコール。とにかく思考が纏まらない。ゴムを着けてる藤田の前で寝そべりながら、自分がどうすべきかすらわからない。それどころか視線は、ゴムを着用した藤田の勃起した男性器に釘つけになる。なにあれ？ おっきい。しかもすごい反り返ってる。

……。

迂闊にも、不貞にも、ふしだらにも、その瞬間生唾を飲み込みながらあたしの脳裏をよぎったのは、なんて気持ちよさそうなおちんちんだらう……などと、夫を持つ女としては有り得ない感想だった。

酔ってるから。

ずっと寂しい思いをさせられていたから。

そんなの……言い訳にしたいくないし、出来ない。

しかし身体は硬直したまま。迫ってくる藤田をただ見上げることしか出来ない。

彼はそんなあたしに覆い被さりながら、「薰ちゃんって、こういう時も冷静なんだな」と耳元で呟いた。

違う。あたしはそんな人間じゃない。あたしは冷静でも飄々ともしていない。ただ自分の身に何か起こった時、ただじつと声を押し殺して静観しているだけ。大抵それで危機は去って行く。でもこれは違う。あたしが明確な拒絶を示さないといけない。叫び声を上げ、腕を振り回し、自ら立ち上がった足で逃げないといけない。わかってる。わかっていた。

なのに、藤田がその大きく膨らんだ、とても鋭い段差の力りを持つ亀頭を、陰唇に押しつけた時、あたしの口から放たれたのは、「……ちょ、つとお……………駄目、だって」という弱々しい抵抗の意志のみだけだった。

あたしを見下ろす藤田の口元には微笑み。抵抗されたとも思っていない。恥じらいを見せた女を愛でるような目。

違う。

あたしは。

本当に。

駄目だって。

思って……。

不意に「ぬちゅ」という、濡れそぼった粘液と硬い肉棒が擦れる音が響く。同時に、懐かしい感触が身体を貫く。他人が、男が、自分の中へと入ってくる感触。熱く、硬く、逞しい男性器が、力強く自分を掻き分けて貫いてくる。

「……いつ、や」

その言葉は、嫌悪感に押し出されたものでは無かった。

全身の肌が総毛立つと同時に、細胞がふつつつと沸くのを感じる。

迂闊にも……満たされた。そう思ってしまう。

「うわ、薰ちゃん、絡みついてくるよ……」

苦痛とも快感とも取れるような、しかめた表情を浮かべる藤田の言葉に恥辱を覚えたわけでもない。

あたしはその久方ぶりの剛直なまでの男の感触に、包み込まれるような安心感と同時に身体の芯を電流で打ち貫けられたような激しい快感に見舞われた。おかげで異性として何とも思っていないなかったはずの旧友に、寝込みを襲われるという状況において、「絶対に訴えてやる!」という憤怒よりも、「あなた……ごめん」という夫に対する悔悟よりも、「ふぁ……す、す……い……」というなんとも情けない声を上

げてしまった。

「やっ……やだ……いつ、あ……ああ」

勝手に奥歯が食いしばる。

背中が仰け反り微かに浮き、両膝はだらしなく左右に倒れ、つま先が限界までぴんと伸びる。

ちりちりと下腹部から全身に、とりわけ頭にむず痒い電流が流れていく。

なんとも言えない、生殺しのようにすら思える身悶えする心地良さ。

「う、うそ……だめ……だめ……ああ……やだ……」

挿入だけで、絶頂間近まで昂ぶっている自分を恥じる声。

藤田はそんなあたしの内情を見透かしたように、優しげに微笑むと、「いいよ。イキな」と声を掛け、そしてさらに腰をゆっくりと前に突き出した。

あたしはてつきり、彼は全てあたしの中に埋没していたと勘違いしていた。それは普段の経験則。旦那が入ってくる場所の上限。だから、藤田もきつとそうだと思いついていた。しかし彼は、いとも簡単にその奥まで踏み込んでくる。凶暴なまでのフォルムの亀頭が、さらにあたしを貫き、そして掻き分けてくる。普段擦られることもない膣壁は、藤田によって容易く押し広げられた。

「だめ……だつての……ちょっと、あんた……そんな、とこまでっ」

浮遊感漂う性的快感の中、あたしは驚きを隠せず、無意識にそう口走った。あまりの衝撃にあたしの表情と口調は、普段通りのそれに戻っていたらう。ゴムを着けているとはいえ、旦那にすら許していないあたしその場所を、他の男に許してしまったことへの責任感が、非日常の興奮から一瞬だけ素に戻らせた。

しかしその直後、下腹部を中心に広がりあたしを襲う激しい電流。

背中が殊更激しく仰け反ったのと、首の皮が張り詰めるほどに顎が天井を向いたこと。そして「あっ！ いっっ！！！」というはしたない声だけは、大きく、真っ白な火花に覆われた意識の中でも感知できた。

自分の中で一瞬時間の流れが途切れる。

気がつけばあたしは、両手両足を使って藤田の身体にしがみついていた。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あんっ」

男に媚びるような喘ぎ声は我が耳を疑うほどに甲高い。しかし藤田が腰を前後する度に、喉からは声が押し出される。いや、自分から出している。演技というわけではない。まるでぐずった子供が泣いてストレスを発散しているよう。喘げば喘ぐほど気持ち良くなる。激しく自分を求めてくる逞しくも美しい男に身を託し、気兼

ね無く大きな声でよがることは、体内に溜まった鬱憤や不安が吐き出されていくのが手に取るようにわかる。自然と自分から声を出すようになっていた。それはより一層セックスに、そして目の前の男に意識を集中させていくことになる。

「あつ、だめっ！　また、イクっ、イクっ！　ああ、だめ、イクイクイクッ！！」
何度目だろうか。

というよりも、その申告は正確ではない。

最初の絶頂からあたしの身体は、全身が性感帯になったかのように、彼の男らしい肌が擦り合う度に電流が流れる。甘い電流が常に身体を覆う、断続的に絶頂しているような状態だった。

「……………イツ、クウツ！！！」

その中でもとりわけ大きい快感に、あたしは身を振るように身体を痙攣させた。膣肉が、藤田に強く抱きついているのがわかる。あたしの中でより大きく、より硬く存在感を増した、奥深くまで貫いている藤田そのものを、あたしの性器は痙攣交じりの抱擁を見せつけた。

あたしの絶頂を受けてピストンを中断していた藤田は、「うっ」と辛そうな顔を見せた後、そのまま苦笑いを浮かべた。

「薫ちゃん……締め付けすぎだつてマジで。ちょっとちんこ痛い」

「はあ、はっ、はあ、んっ……………」

「なんとか呼吸を整えながらも、反射的に謝ってしまう。」

「久しぶりだから？」

「……………」

「そっぽを向きながら、小さくそう答える。」

「薫ちゃんって隠れ巨乳だったんだな。全然気付かなかった」

「正常位で繋がったまま、あたしの絶頂が収まるのを待ち飽きた彼は、両手で乳房を下から持ち上げてくる。それだけぞわぞわと背中をまたしても甘い電流が襲う。」

「手の平で乳房が擦れた時には、背中がびくんと浮き上がった。」

「皮肉なことに、幾度となく大小の絶頂を与えられたあたしの意識は鮮明さを取り戻していき、酔いも有つてどこかあやふやだった現状を正確に掴みかけていく。同時に胸に突き刺さるのは、言うまでも無く、罪悪感と危機感。」

「とんでもない事をしてしまっている。よりにもよって、旦那の親友とも呼べる、そして自身の旧友でもある藤田と、セックスしてしまっている。」

「最初こそ、酔いで意識があやふやな隙を突かれたという言い訳も出来ようが、そ」

の後、彼の身体の下で淫らに喘いだ罪は取り繕うことは出来ない。相手は友人。きちんと拒絶していればわかっていたはずだ。旦那に相手をしてもらえなくて欲求不満だった？ 馬鹿馬鹿しい。そんなものの免罪符になるわけがない。そもそも、いくら藤田とはいえ、男と二人なのに自棄酒を続けたことに問題がある。それも約束を反故にした旦那の所為？ そんなわけがない。仕事なのだ。仕方が無い。責められるべきは、あたし。しかしそれにしても、とは思う。もし他の男なら、ここまで警戒心を解くことも無かっただろう。旦那も思っているだろうが、藤田があたしに手を出してくる可能性なんて考慮すらしていなかった。とにかく自身の愚かさの後悔し、そして未だ明確な拒絶を示せない、肉欲に抗いきれない弱い自分を嫌悪する。

「しかし白石もひどいよな。半年もほったらかしにするなんて」

なんでそんな事知ってるの？ 酔ったあたしが言った？ 旦那から聞いた？
どちらにせよ……。

「旦那は……悪くないし」

そう。仕事で、疲れていて、それに……きつと……あたしに、魅力が無いから。あたしの返答に藤田は困った笑顔で黙ってしまふ。繋がったままのあたし達に静寂が訪れる。それを破ったのは、自分の口から不意に出た弱々しい問いかけだった。

「……ねえ？ あたし……変じゃない？」

「え？ 何が？」

「だから、その……声、とか……身体、とか」

何を聞いているんだろうか。馬鹿みたい。

「いやめっちゃ可愛いし、スタイルも最高だけど」

「それは、藤田の好みとして？」

「まあそれもあるけど、一般論としてそうじゃね？」

「……本当に？」

藤田は照れ笑いを浮かべる。

「ていうか、薫ちゃんの中にあるコレが証明してると思うんだけど」

その言葉にあたしは耳まで真っ赤に染まる。お腹の中でガチガチに硬いそれが、ぐいっと隆壁を持ち上げるように律動した。生で触れあう亀頭から伝わる温度はまるで熱せられた石みたい。火傷しそうなほど熱い。それは確かに、あたしを滾るほどに犯したいという証明以外の何ものでもない。

自身に向けられるそんな欲情は、普段であれば問答無用で嫌悪感が沸くものだろう。しかしこうして一旦肌を重ね、あまつさえ絶頂を繰り返すほどに深く結びつい

た雄相手だと、その昂ぶりは、正直なところ、女として優越感をくすぐられるし、最近の夫婦生活を鑑みても安心感すら沸く。そんな自分を浅ましいと自嘲しながらも、本能の奥の部分には逆らいきれない。

「あつ、やん……、動くなあ……馬鹿」

「イキっぱなしだもんね」

「ちが、う」

「違わないって。じゃあ動くよ？」

「だめ、まだ……あつ、あつ、ちよ、っと……はあつ、うっ」

やだ、すごく甲高い声を出している。駄目なのに、こらえる事が出来ない。こんな声、旦那にしか聞かせちゃいけない。あまりに恥ずかしくて目をぎゅっと瞑ると横を向く。

「くすぐりたい？」

黙って頷く。

「これくらいならどう？」

そう言ってゆっくりと腰を前後させる。

「はっ、んっ……あつ、い……いい……それ、くらいなら……」

やばい。

本当気持ち良い。

さっきまでは身体ごと揺さぶられるように突かれてたからよくわからなかったけど、こうしてゆっくりまさぐられるように動かれると、あたしの中をこりこりと擦るその段差がより強調される。

「薫ちゃんは激しいのと優しいのどっちが良い？」

「わかんない……………はっう」

じりじりと身体中を溶かすような抽送に思わず背中が仰け反る。ガチガチに硬いおちんちんが中で存在感を殊更強く示す。犯されているというよりは、繋がっているとこの感覚に満たされ、頭の中にじんわりとした幸福感が広がっていく。

違う。駄目。そんな風になっちゃ、駄目。あたしには旦那が、いるんだから。好きな人が、いるんだから。

「白石はいつもどんな感じ？」

「……………アホな事、聞くんじゃないっての」

そう返すものの、頭の中では旦那のセックスを思い返す。すっかり記憶の片隅に消えそうになっていたそれを引き出してくる。旦那は、どちらでもない。普通、だ

と思う。こんな風に緩急をつけて、ゆっくりとあたしを味わうような動きもしないし……。

「こんな感じ？」

「あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！」

いきなりこんな激しくしたりもしない。

でも、すごい。

藤田の腰がガツンガツンと下腹部に叩き付けられる度に、ベッドごと激しく揺さ

ぶられている。

やだ。

おっぱい滅茶苦茶揺れてる。

ちよつと痛いし……滑稽にすら思える。

これが原因なのかな？ 旦那も、これ見て馬鹿みたいって思って、あたしの事抱いてくれないのかな？ ううん。多分違う。旦那とする時は、こんな風に揺れた事無いから。それでも恥ずかしくて、なんとか両手で隠そうとする。本当はシーツを掴んでないと、意識ごと飛んでいっちゃいそうで不安だけど、なんとか胸の前で腕を交差させる。

「なんで今更隠すんだよ？」

「うるさ……んっ、あっ、ああっ！ 激し、すぎ、だつてば……馬鹿あ……あっあ
っあっあっ！」

「すげえ揺れてエロいよ。薫ちゃんのおっぱい」

エロい？ 何それ。褒めてるの？ 褒められてるの、かな？ 皮肉？ わかんない。男の人って、わかんないよ。

「ほら。見せてって」

ぐいっと強引に腕をどかされると、そのまま手首を掴まれたまま万歳のポーズでベッドに固定される。無理矢理露出させられた事でより辱めを受けている気がしてしまう。力尽くで支配されている事に、怒りや屈辱よりも、男性の逞しさに胸が甘く鼓動を打っている。そんな自分に困惑する。

「ほら。すごく綺麗だし」

腰を振りながら食い入るようにあたしの胸を見つめる。その表情はセックスに没頭している旦那とそう変わらない。本当に気持ちよさそうだし、本当に興奮しているように見える。変な話だが、藤田のそんな顔で少し安堵する。女としての自信を失っていたあたしはそれは、ほんの少しだけ傷が癒えた。でもやっぱり旦那と比べ

ると随分余裕が見える。手つきや腰つきも慣れている。あんまり藤田の浮いた噂って聞いたことがないけど、やっぱり裏でやる事はやってたんだ。まあ……見た目は良いから……あつ、馬鹿。乳首舐めないでよ……。なんで腰振りながらそんな事出来るわけ？

「ね、ねえ？」

絶妙な力加減で乳首を舌で転がし続ける藤田の後頭部に手を添えながら、弱々しくも問い掛ける。

「何？」

「……本当？」

「何が？」

「さっきの」

「エロいって？」

「……ん」

「本当だって。ていうかこんなの普通にエロいだろ」

そう言いながら、あたしと上目遣いで視線を合わせながら、こりつ、と乳首を甘噛みされる。

「ひゃう」

優しくも甘美な感触に思わず身を振る。立て続けに、ぬるりとした感触の舌が乳輪から乳頭まで、満遍なく生暖かい唾液を塗りたくっていく。

「うう、あ……」

男性器による直接的な刺激とはまた違った、ふわりと身体を浮かせるような快感に吐息まじりの声が漏れ出る。

藤田はその愛撫を一旦止めて、腰の動きも殆ど静止させる。

「もしかして薫ちゃんってさ、ご無沙汰なのを自分の所為だと思ってる？」

凶星。

照れくさくて眉間に皺を寄せながら視線を逸らす。

「……悪い？」

口調も自然と無愛想になった。

「それは絶対無いって。すっごい可愛いし、スタイルも良いじゃん」

馬鹿。たとえゆっくりでも動きながらそんな事言わないで。あんたの大きいんだからちよつとでも擦られると変な声出ちゃう。

「……嘘ばかり」

「マジだって」

「絶対嘘」

「信用無いなあ」

横目で藤田を覗き見ると苦笑いを浮かべていた。

「学生の中からあんた適当な事ばかり言ってたじゃない。それが旦那の上司とか本当笑わせてくれるんだけど」

普段の口調で会話するように努める。強引な照れ隠し。いまだに藤田とセックスしているなんて現実感が希薄。

「誠実な正直者で通してたつもりなんだけど」

「よく言うわよ」

いつも通りの軽口の応酬。旧友としての会話を繰り返し平常心を取り戻してく。しかし冷静になればなるほど、肌と粘膜に密着する男のごつごつした身体の硬さと熱さが鮮明に感じ取れてしまう。今自分が、男に抱かれているという現実から逃れられなくなる。

「でも薫ちゃんがイイ女ってのはマジ。白石は疲れてるだけだって」

「だ、から……今はあたしも白石だってば……」

遠回しに、自分は旦那の女であることを強調する。もう身体は逃れられない。せめてもの抵抗。自身の気持ちの表明。

「ああそうだった。でも本当エロい身体してると思うよ」

「エロいっていう……あっ、ん」

馬鹿。動くなつてば。普通に喋ってたのにエッチな声出しちゃうと恥ずかしいでしょうが。

「おっぱい大きいし、太股も丁度良い感じにむっちりしてるし」

「……遠回しに、太ってる……って……言ってる？」

ゆっくりとピストンを再開されると、言葉は途切れ途切れになるし、下腹部からにちゃにちゃと粘り気のある音が響いて、また滅茶苦茶にされてしまうのだろうか、という不安と……微かな期待が沸き起こる。そんな自分に激しく嫌悪感。あだし、本当欲求不満だったんだ……やだな。今すぐ旦那の元へ走って、謝りたい気持ちに駆られる。しかしもはや身体の制御権は完全に奪われてる。

「そんな事無いって。ぱっと見かなり痩せてる方じゃん。捻くれてんのは相変わらずだな」

「あっ、あっ、あっ、ん……あんたも、相変わらず……言葉が……やっ、そこ、

ん……………軽いのよ」

「まあ俺のは多少身内鼻根はあるかも。ぶっちゃけ、昔薫ちゃんの事好きだったし
た」

は？ 何言ってるの？ なにどさくさに紛れて……………ちよ、つと、激しく……………しないで……………。

「あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！」

「ほら。全部エロいよ。顔も、声も、胸も、お腹も、脚も、音も」

そう言うと藤田はあたしの膝裏を抱え込んで、より深くまで侵入してくる。

彼が貪るように腰を振る度に、あたし達が繋がる箇所から、耳を覆いたくなるような下品な音が鳴り続ける。

ぬっちゃ。

ぬっちゃ。

ぬっちゃ。

こんな音聞いた事無い。どうやってたらこんな音が鳴るんだろうか。それを耳にする度、自分がものすごくいやらしい事をしているんだってことを認識させられる。

「あぁっ、やつ、すこ、いっ！ ……ちが、だめっ、そんな奥っ、はっ、あぁ、ん

」

奥を征服する雄々しい感触。あまりに強烈な刺激に、あたしは思わず両手で藤田の胸を押す。しかし彼のあたしを貫く動きはより激しさを増す。それもそうだ。あたしの手はまるで力が入っておらず、押し返すどころかまるで撫でるように彼の胸に添えられているだけなのだから。

「あんっ！ あんっ！ あんっ！ はっ！ んっ！ あああっ！ んっ、ふうっ！」

更に藤田はあたしの下半身を抱え込み、あたしの腰がぐいっとベッドから完全に離れて、お尻を天井に突き上げるような格好になる。はしたないなどと思う暇など無い。もはやもう抵抗の余地など無いと思いきや知らされたあたしに出来るのは、少しでも、表面上だけでも、自分が支配されているわけじゃないと強がることだけ。

「はっ、早く出したら？ 我慢してるんでしょ？ もうおちんちん、すっごいぱんぱんだよ？」

ああもう。何言ってるんだろ。すごくやらしい事言ってしまった気がする……でも実際おちんちんは、もうはち切れんばかりにぱんぱんだ。ただでさえあたしの中を勇ましく掻き分けて、奥深くまで余す事なく犯してくるのに……すっごい……まだおつきく……馬鹿じゃないの……ああだめ。変な顔になっちゃう。

「あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ いっ！ あっ！ これ、だめっ！ ……うあ、そんな、深い、ってばあ……」

「すげえ可愛いよ」

可愛いわけではないでしょ。絶対変な顔してる。ああ馬鹿。何顔近づけてきてんの。やめて。キスは駄目。絶対駄目。馬鹿。こら。アホ。あたし達。友達でしょ？ あたし好きな人居るの。旦那居るの。あんた旦那の友達でしょ？ 上司でしょ？ 結婚式の時スピーチしてたじゃん。あたしと旦那の幸せ願ってるって……なのに、なんであたしの上でそんな腰振っちゃってるわけ？

「好きだったよ。薫ちゃん」

は？ 嘘つけ。そんな素振り全然見せなかったじゃん。ああでもあたしってそういうの鈍感なのかも。美香子が昔こいつの事ちよっと良いって思ってたのも気付かなかったし……。

「やっ、キス、駄目っ」

マジで止めてってば。唇当たる。駄目。あたし、抵抗出来ないんだってば。身体動かせないの！ だって……だってだって、あんたのおちんちん奥まで来るから、その度に腰がぐがなくなっちゃうんだってば！ ああもう！ 末代まで呪ってやる

んだか……ら……んっ……ちゅ……はう……馬鹿、やめ……ちゅう……ちゅ、ちゅ……は、ん……やめ……ベロチューは本当だ、め……んっ、く……ちゅぶ、ちゅう……くちゅ、くちゅ……つぶは……もう駄目だ……ちゅく、ちゅぶ……馬鹿、舌、吸い過ぎ……うう、口の中が暖かい。馬鹿じゃ無いの？ 人妻に唾液飲ませるとか……何してんのあんた。

「やばい、もういきそう」

もう、じゃないし。まだ？ って感じなんだけど。

「いくよ。」

さっさといけ馬鹿。いちいち聞くな！

「ああ薰ちゃん。マジ気持ち良い」

……本当なのかな。本当……なんだろうな。気持ちよさそうな顔してる。……だからなんだっていう話だけど。

あたしとするのって気持ち良いのかな？ 普段からちゃんと可愛くエッチ出来るんだろうか？ 美香子や百合みたいに女っぽく振る舞ってるんだろうか？

藤田があたしから離れるとゴムを外す。パチンと音を鳴らすと、生々しい黒光りをした肉棒がぶるんと暴れるように揺れた。その様子に思わず胸がぎゅう、と切

なくなる。男らしい。不意にそう思ってしまった。あたしは犬みたいな浅い呼吸をなんとか整えようとしながらも、お腹の上でおちんちんを自分で扱っている藤田を見届ける。ゴムをしているとはいえ外で出された安心感と同時に、自分が最後まで気持ち良くしてあげられなかったなどと、余計な責任を感じてします。本当に余計。馬鹿みたい。

「うっ」

藤田の端正な顔がそんな声と同時に歪む。すると屹立した彼の男根からは、びゅっ、びゅっ、と勢い良く白い精液があたしの胸元からお腹にかけて白く汚していく。熱い。すごい。こんな、いっぱい。

「は……う」

思わずあたしも声を漏らしてしまう。

藤田は長い間そのままおちんちんを扱きながら、最後の一滴まで搾るようにあたしのお腹に精液をぶちまけていく。あたしはそれを黙って見届けていた。おへそを中心に、白い水たまりが出来た。出しすぎ。馬鹿。お腹が熱い。でも、汚らしいとは思わない。つい先ほどまで肌を重ねていた余韻だろうか。身体が昂ぶっているとはいえ、夫以外の精液を、子供を作るための液体を、忌避するものと思えない自分

を恥じる。

「……気が済んだ？」

努めて普段の口調で問い掛ける。どんな顔をしているのかは自分でもわからない。でも怒ってはいないだろう。きっと呆れているだけだ。相手にも、そして何より自分に。

藤田も出すものを出して、冷静になったのか、どこか気まずそうに「あ、うん」と答え、あろうことかそのまま再び唇を重ねようとしてくる。ゆっくりと顔を近づけるその動作は、さも恋人のような優しいキスをしてくれるんだらうと安易に推測出来るが、すっかり酔いも、そして久しぶりのセックスの余韻も冷めたあたしにとっては、迫り来るそれは、逞しくも巧みで、その上眉目秀麗な男性などではなくて、ただの旦那以外の男、だった。その辺に蔓延するあたしから見れば十把一絡げの男。男なんてあたしにとっては旦那とその他大勢。そのその他さんの顔を両手で押し返す。

「調子乗らないで。ティッシュ」

藤田はやや不満そうに下唇を突き出すが、それ以上強引に何かをしてくることもなく、あたしの上から退くと言つとおりティッシュを何枚か重ねて、まずはあた

しのお腹や胸元にかけてくれた。瞬時に精液を染みこませていくティッシュを軽く上から抑えながら拭き取っていく。量は勿論のこと、ティッシュの上からでもわかる粘り気や手触り。本当に旦那以外の男とセックスをしたんだ、と思い知らされる。頭の芯から重い。肩や背中が押しつぶされそう。

「ぶっだった？」

どうだった？ どうだったもへったくれもあるか。

「最悪」

「マジで？ 結構気持ちよさそうだったけど」

そういう問題じゃ無いでしょ。そりゃ久しぶりだったし、あんたはさぞセックスに自信があるんでしようけれど。そんな諸々の悪態は胸にしまいこみ、ティッシュを丸めてゴミ箱に投げ捨てるのと、ベッドの脇に放り投げられていた下着や服に手を伸ばす。そして一言だけ。

「忘れて」

「は？」

「この事は忘れてって言ってんの。あんただけが悪いわけじゃない。あたしにも非があった。反省してる。だからもう忘れて。二度目は無いから」

有無を言わさない、我ながら厳格な口調。こんな時ですら声を張り上げることもなく、淡々としてしまうのは如何なものかと思うが、今更泣き暴れたところで時間が戻るわけでもない。自分にもつけ込まれる隙があったのは確かなのだ。しかしあたしの口調からは、静かに凝縮された怒りが垣間見えたのか、藤田も「……わかった」とだけ返す。

服を着て部屋を出る時、背中から「ごめんな」とだけ申し訳なさそうに声を掛けられた。あたしは振り返りもせずに「謝んなくてもいいから忘れて。あともう家に遊びにも来ないで」と言い残して部屋を出る。その際藤田が慌てて「そういえば白石が迎えに来る手はずになってんだけど……」と引き留めてきたので、あたしは今度こそ振り返り、彼を真っ直ぐ見据えて口を開く。

「不用意に酔っ払ったあたしも悪いけど、後輩の、友達の、部下の嫁の寝込み襲ったあんたと一緒に居ろっっていうわけ？」

声はヒステリック気味に少々上擦っていた。口元も皮肉めいた笑みを浮かべていただろう。こんな怒り方、あたしもやれば出来るんだ。でも二度としたくはない。醜悪で、自分勝手な怒り。

どっちも悪い。あたしも、藤田も。だから忘れて。そんな想いを静寂の中藤田と

合わせる視線に詰め込む。

彼も付き合いは長い。あたしの事は友人としてではあるが、理解しているだろう。

「わかった」

両手を上げて溜息交じりにそう言った。

「それじゃ」

再び背中を向けて今度こそ部屋を出る。

「あ、待てよ。タクシー代くらい……」

「結構です」

申し出の言葉を途中で遮りながら外へ出る。

逃げるような足取りでマンションの外へ出た。

すれ違う人々の視線が気になる。

大罪を犯してしまった犯罪人のように、背中を丸め、肩を落として道の隅っこを歩いて行く。

何も考えずに歩く。

余計なことは考えるなという命令を表層意識で固める。

しかしふと足が止まる。

ああ。

駄目だ。

忘れることも思考停止も叶わない。

浮気をしてしまった。

旦那以外とセックスをしてしまった。

その事実は誤魔化しようもない。

知らず知らずに欲求不満が蓄積されていたようで、硬い男根の余韻が残る下腹部

はやけにすつきりとしている。

その場に蹲ると自然と涙が流れた。

「……本当、馬鹿じゃないの」

自業自得とはこのことだ。

メールが鳴る。

旦那からだった。

『やっと仕事終わった。今から迎えに行くよ』

慌てて返信する。

『大丈夫。今タクシーで帰ってるところ』

少しでも藤田と部屋で二人きりだった時間は少なかつたと思ってもらいたい。
なんとか立ち上がるとぼんやり夜空を見上げる。

「……もうお酒やめなきゃ」

鼻を嚙りながら固くそう決心した。